

須磨巻における漢詩文と和歌との関わりについて

藤河家 利 昭

はじめに

ているか、さらにそのことが源氏にとって持つ意味についても考えてみたい。

『源氏物語』須磨巻において、『白氏文集』等の漢詩文が多く

引用されていることについては従来から論じられている。^(注1) 中

も白楽天の江州左遷時代の詩が、源氏謫居の構想や流謫の折の

理想像の基になっていること、また退去のわびしさを強調する

こと等、その役割が説かれている。^(注4)

一方で、漢詩文に対して和歌については、「このような須磨謫

居の物語は、また古今集の春夏秋冬の部立て意識と抒情をふま

えての物語化であったともいえよう」^(注5)、また、「それ（筆者注、

須磨下向）を物語の世界では主情的に受けとめていったのであ

り、そこで漢詩文と融合して和歌が大きな役割を果たしている」^(注6)

等説かれている。

ここでは漢詩文と源氏の歌との関わりを捉えることによつて、

漢詩文をどのように受けとめ、和歌の特色をどのように発揮し

一

先ず、『白氏文集』をふまえ、または地の文に引用している

場合の、源氏の歌との関わり方から見ていきたい。

道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に

乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ

申の刻ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道に

ても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかし

さもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、

松ばかりぞしるしなる。

唐国に名を残しける人よりも行く方知られぬ家居をや

せむ

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」と

うち誦じたまへるさま、さる世の古事なれど、めづらしう
聞きなされ、悲しとのみ、御供の人々思へり。うちかへり
みたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千
里の外の心地するに、權の雫もたへがたし。

古里を峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲居か
つらからぬものなくなむ。
(2・一八六―七)^(注7)

「唐国に」の歌の「唐国に名を残しける人」は、屈原を指す
と言われるが、池田勉氏説のように「家居」との関係から「白
居易の左遷謫居」^(注8)のことと見るべきであろう。源氏が須磨に
持つて行く物として、「かの山里の御住み処の具は、え避らずと
り使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、
またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持
たせたまふ」(二七六)と、『白氏文集』が見えている。それを
受けて、ここでは実際に須磨に赴くと考えられるので、白楽天
を指すと見るべきであろう。

「唐国に」の歌は、謫居の詩によって唐国に名を残した白楽天
よりも、さらに行方の知れない住まいをするのではないかと憂
えている。このように思った直接の契機は、大江殿が荒廢して
松だけが標しに残っていたので、人の世のはかなさ、ひいては
我が身のはかなさを覚えたのである。「松ばかりぞしるしな
る」は、「我が宿は松にしろしもなかりけり杉むらならばたづね
きなまし」^(注9)(赤染衛門集)が「参考」としてあげてあるが、和

歌的な表現であると考えられる。

「うらやましくも」は、『伊勢物語』七段に「むかし、男あり
けり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢・尾張のあは
ひの海づらをゆくに、波のいと白くたつを見て、いとどしく
過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな となむよめ
りける。」^(注11)とあるのによる。男は、京に住みづらくなつて東国に
行ったのであり、「返る波」は古里に帰れない自分を羨ましく思
わせる。源氏も、行方の知れない「家居」をするのではという
心細さがある。この歌を吟唱したことが、「人々の心情をその
ままだ弁するカタルシス的な機能」^(注12)を持つと言われている。こ
の歌を吟唱する源氏の姿は、人々にこのような境涯に身をおい
たことをあらためて認識させ、悲しみを呼び起こすのである。
古里を恋しく思う心が表に出るのはこれを端緒とする。

「まことに三千里の外の心地するに」は、『白氏文集』卷十三、
七言絶句「冬至楊梅館に宿る」の「十一月中長至の夜 三千里
外遠行の人 若為ぞ独り宿する楊梅館 冷枕单牀一病身」^(注13)によ
る。この詩を引いたのは、前に白楽天の謫居のことがあったか
らであり、また源氏の古里を遠く離れた旅に重なるためである。
「三千里の外」としたのは、誇張のようであるが、「来し方の
山は霞はるかにて」という空の景であることが注意される。な
お「權の雫もたへがたし」は、「我が上に露ぞ置くなる天の川
とわたる舟の權の雫か」^(注14)(古今集卷十七雑上、読人しらず)によ

るが、舟旅であるから涙を「權の雫」としたのであり、同時に「天の川とわたる」から源氏の歌の「ながむる空」に続けるためであろう。

「うらやましくも」の歌は、古里を恋しく思わせるものではあるが、「返る波」を自分と相反するものと捉えていた。それに対して、「古里を」の歌は、峰の霞が古里を隔ててはいるが、眺める空は同じ「雲居」であろうかとして僅かに抛り所を求めている。それがまた辛い気持ちにさせるのである。この両歌の関連性を見ると、いずれも旅中の景物を捉えてそれに古里を思う気持ちを託するのである。そして、「返る波」を羨ましく思うとともに、空を眺めて慰めを見出そうとするのであり、新たな場面面の展開がはかられている。しかもそれは「三千里の外」という白詩の情景をも取り込んだものであった。前の「唐国に」の歌では「家居」の行方が知れないとしたのに対して、この「古里を」の歌では「雲居」を古里の方向として眺めるところに両歌が対応し、それによっていつそう抛り所のなさが感じられる。しかし、前者に対して、後者は僅かでも古里との繋がりを求めようとする点が対照的であるとも言える。

このように「古里を」の歌は、『伊勢物語』の歌や白詩を受けて詠まれている。「うらやましくも」の歌は、「返る波」と東国へ行く男とは相反するものと捉えられていたが、源氏の歌では、「雲居」を古里に繋がるものとして捉えているという相違が

ある。しかし、「返る波」・「雲居」のような景物に寄せて古里を恋しく思う気持ちを表わそうとするところは同じである。

「うらやましくも」の歌が引かれたのは、源氏の須磨下向と『伊勢物語』の東下りとを重ねるためだけでなく、このように景物に寄せて旅の心を表わすという方向性を、基本的に受け継ぐことを示したものと考えられる。一方、「三千里の外」の白詩は、故郷を遠く離れた旅の孤独な悲しみであるが、源氏の歌では、旅の辛さを憂えながらも、古里との繋がりを景物に求めている。このようにその土地の景物に寄せて旅の心を詠むという羈旅歌の特色を生かそうとしている。従って、白楽天謫居のことやその詩が引かれたのは、それらをふまえながらも、むしろそれを越えてその土地に深く関わっていく源氏の旅の独自性を、和歌の発想・表現によって語るためであると考えられる。

次も同様に、『白氏文集』を地の文に引用している場合の、源氏の歌との関わりを見ていきたい。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただ

ここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ

とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおほゆるに忍ばれで、あいなう起きあつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

(一九八―九)

「いとど心づくしの秋風に」は、「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」(古今集卷四秋上、読人しらず)によりながら、「秋」を「秋風」に、また「関吹き越ゆると言ひけん浦波」は、「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」(統古今集卷十羈旅、在原行平)によりながら、「浦風」を「浦波」に変えている。その秋風によって、行平歌のように浦波が夜毎に近く聞こえて他になく心にしみるものはこういう所の秋であるとしている。

「枕をそばだてて四方の風をききたまふに」は、『白氏文集』卷十六、七言律詩「香鑪峰下に新に山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す、五首」中の第四首の三・四句「遺愛寺の鐘は枕を敬てて聴き 香鑪峰の雪は簾を撥けて看る」によるが、「鐘」ではなく、「四方の風」としている。その風を聞いていると、「波ただこももとに立ちくる心地して」とあることから、

その風は荒い波を打ち寄せていると取られる。これは先の「秋風」によって「浦波」が夜毎に近く聞こえる情景に立ったものである。^(注15) その身近に打ち寄せて来るように思われる波は、涙を落とさせる。^(注16) 「枕浮くばかりになりけり」は、「独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」^(注17) (古今和歌六帖五、枕)等による。そうすると「枕をそばだてて」と白詩をふまえたのは、白楽天の謫居の様子に重ねるとともに、中西進氏が説かれるように、^(注18) 「枕浮くばかりに」という和歌をふまえた表現を導くためであったと考えられる。

源氏の歌の「恋ひわびてなく音」は、「源氏のことを「思ふ」都の人々の泣く声とされて^(注19)いるが、直接には我ながら実に物寂しく聞こえる琴の音と考えられる。それは同時に「四方の風」を聞いて「波」がここのうち寄せるような気がして涙している源氏の心を表わしている。その音と一つになって聞こえる「浦波」は、自分と同じように恋しく思う古里の方から「風」が吹いて来るのであろうかというのである。即ち、「浦波」は自分と共通の思いを持っているのではないかと捉えているわけである。

この「風」と「浦波」の関係は、先の「秋風」と「浦波」の関係にも対応している。即ち、古今集歌に基いた「心尽くしの秋風」は、源氏の歌では「浦波」を立てる「風」として受けとめられている。また行平歌に基いた「関吹き越ゆると言ひけん浦波」は、古里を恋しく思って泣く自分と共通性のあるものと

捉えるのである。これは『伊勢物語』の「返る波」の転用であると考えられることもできる。一方、白詩に基いた、枕を欝てて聞く「四方の嵐」は、白楽天の謫居と重ねられて、源氏の歌では、「思ふかた」、即ち古里の方から吹いてくる「風」として捉えられていると考えられる。白楽天の謫居と源氏のわび住まいを重ねながらも、源氏の歌では「風」や「浦波」という古今集読人知らず歌や行平歌に基いた表現を用い、土地の景物に寄せて古里を思う心を表わしている。

沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。

ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

とのたまへば、良清、

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

民部大輔、

心から常世をすてて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

前右近将監、

「常世いでて旅の空なるかりがねも列におくれぬほどぞ慰む

友まどはしては、いかにはべらまし」と言ふ。

(二〇一) (二)

「雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを」は、『白氏文集』巻五十四、五言律詩「河亭晴望」の「晴虹橋影出で 秋雁槽声来たる 郡静まりて官初めて罷む 郷遙かに信未だ廻らず」による。その槽の音に紛う雁の鳴き声を、源氏の歌では、旅の空を飛ぶ悲しい声と捉え、雁を「恋しき人のつら」としている。即ち、自分の恋しい人の仲間ではないかと見ること、異郷にある悲しみを慰めようとしている。これは直前に「古里の女恋しき人々」とあることと対応し、源氏が人々の心を汲んで、雁を京にいる恋しい人の悲しい鳴き声に擬えたものと見られる。

良清の歌は、雁の鳴き声を聞いて、昔の友ではないが、次々と昔のことが思い出されるといふのであり、これも雁の鳴き声によって古里を思う気持ちをそえられるのである。民部大輔の歌は、古里を離れて鳴く雁を、今では自分に無関係とは思えないとしてしている。前右近将監の歌は、自分が皆と共にあることを、雁が列に遅れぬ姿に見出して心を慰めている。このように雁を恋しい人の仲間と見ることから始まって、昔のことを思い出させるもの、自分の異郷にある境遇と似るもの、自分の仲間と共にある姿そのものというように、雁を自分たちにより関わりの

深いものと捉えている。このように白詩によって白楽天の謫居と重ねながら、源氏たちの歌では、土地の景物に寄せて旅の心を表わす羈旅歌の特色を生かしつつ、その土地の景物を通して流離の悲しみに深く向き合う姿勢が示されている。

先の「恋ひわびて」の歌では「浦波」を自分と同類のものと見ていたが、ここでも「初雁」を恋しい人の仲間と見たり、自分と同類のものと見ている。前者は異郷にある悲しみであるが、後者は古里との繋がりを見出して慰めようとしている。また「浦波」と「初雁」とは、やはり前と同じように空間的な対応がある。

二

次に、源氏が直接、漢詩文を吟唱し、それをふまえて歌を詠む場合を見ていく。

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧やへだつる」とのたまはせしほど言はむ方なく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こ

ゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遙かなれども

その夜、上のいとつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまへぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。

うしとのみひとへにもは思ほえてひだりみぎにもぬるる袖かな (二〇二—三)

「二千里外故人心」は、『白氏文集』巻十四、七言律詩「八月十五日の夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶ふ」の三四句「三五夜中新月の色 二千里外故人の心」による。八月十五夜、白楽天は、宮中であつて明月を見、遠く江陵に左遷された元稹を思う。また詩の七・八句には、「猶恐る清光同じく見ざるを 江陵は卑湿にして秋陰足る」とあり、白楽天は、元稹がこの清らかな月光を、このことと同じようには見られないのではないかと心配する。

「見るほどぞ」の歌は、須磨にあつて十五夜の月と重ねて、都を恋しく思い、女君たちのことを思いやるのである。白詩とは立場が逆で、退去した須磨で月を眺めている。また月を見て暫し心を慰めているところも異なる。それは、源氏が都の女君

たちを偲び、女君たちも今宵の月を見て自分のことを偲んでい
るであろうと思われるからである。^(注20)白詩が、月は旧友と遠く離
れていることを思わせるものとして対して、「見るほ
どぞ」の歌では、月は、都との距離は隔たつていても、都の女
君たちとの心の繋がりを持たせるものとしている。

「霧やへだつる」の歌は、賢木巻で、九月二十日の夜、源氏
が宮中から退出する藤壺を迎えに参内した時、藤壺が故桐壺院
在世の頃を偲び、右大臣の権勢下の現状を嘆いて詠んだもので
ある。

月のはなやかなるに、昔かうやうなるをりは御遊びせさせ
たまひて、いまめかしうもてなさせたまひしなど思し出づ
るに、同じ御垣の内ながら、変れること多く悲し。

ここのへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひや
るかな

と命婦して聞こえ伝へたまふ。ほどなければ、御けはひも
ほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘れられて、

まづ涙ぞ落つる。

(二二六)

藤壺の歌は、雲の上の見えない月、即ち故桐壺院在世の往時
を思いやつて、宮中から遠ざけられていることを嘆いている。

その歌に「月をはるかに」、源氏の歌に「月の都は遥かなれども」
とあるように、源氏の場合は明らかに月を見ているが、宮中乃
至は都から遠く離れていて、それらを恋しく思うことは共通す

るところがある。源氏もこういう境遇になって藤壺の心情に深
く共感するところがあるのである。

源氏の歌には、「月の都」のように『竹取物語』が影を落と
していると言われている。また東下りを描いた『伊勢物語』十
一段には、「むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、
道よりいひおこせける、忘るなよほどは雲居になりぬとも空
ゆく月のめぐりあふまで」とある。都の人と再会することを、
月が巡って元に返ることに重ねているところが同じである。

このように源氏の歌は、白詩をふまえながらも、月に重ねて
都の女君たちを思い、また月の運行に我が身の行末を重ねるな
ど和歌的な発想・表現が特徴的である。

「恩賜の御衣は今此に在り」は、『菅家後集』七言絶句、「九
月十日」の「去年の今夜清涼に侍す 秋思の詩篇独り賜を断つ

恩賜の御衣は今此に在り 捧持して每日余香を拜す」^(注21)による。

この詩は、清涼殿に侍していた時に蒙った帝の恩に謝するもの
である。「秋思の詩篇」は、『菅家後集』七言律詩「九日の後朝、
同じく秋思を賦す、制に応へまつる」の六・七句に「恩は涯岸
無くして報いんことはなほし遅し 知らず この意何れにか安
慰せむ」とあり、帝の恩に謝する気持ちと、自らの身を憂える
気持ちとがある。

源氏の歌も、これらの菅詩をふまえて、先の藤壺と歌の贈答
をした夜の、宮中における兄朱雀帝の姿を恋しく思うと同時に

恨めしくも思う気持ちを詠んだものである。ここでは「恩賜の御衣」を（自らの）「袖」に転じ、その袖が濡れることに寄せて帝への揺れる思いを表わしている。

源氏の二つの歌は、白詩が八月十五夜に遠く隔たったものとして旧友を思うのに対して、月や袖に寄せて都の女君たちや兄朱雀帝への思いを表わし、月や袖が都の人々と自分を繋ぐものとしているのである。また「月の都」という遠く隔たったものと、「袖」という身近なものとの対応もある。

次も同様に、源氏によって漢詩文が吟唱される場合の、源氏の歌との関わり方を見てみる。

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすくながめたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、こと物の声どもはやめて、涙を拭ひあへり。昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりて、ましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は奥まで隈なし。床の上には、夜深き空も見ゆ。入り方の月影すこく見ゆるに、「ただ是れ西に行くなり」と独りごちたまひて、

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこと
もはづかし

と独りごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いと
あはれに鳴く。

友千鳥もろ声に鳴くあかつきはひとり寝覚めの床もた
のもし (二〇八〜九)

「霜の後の夢」は、『和漢朗詠集』巻下、王昭君「胡角一声霜の後の夢 漢宮万里月の前の腸」(大江朝綱)による。特に後句は、漢の宮殿を遠く隔たる異国の地で、月を見て悲しみに暮れる王昭君の心情である。この詩を吟唱したのは、胡の国に遣わされた王昭君を思いやって、それが自分の愛しく思う人の身の上に起こりそうに思われたからである。

これに対して、「いづかたの」の歌は、どのような遠い所に迷うか知れない我が身を月がどう見るか恥ずかしいとするのであり、特に下句は江詩と重なる。上句は、先の源氏の歌の「行く方知られぬ家居をやせむ」とも流離の思いを同じくする。

「ただ是れ西に行くなり」は、『菅家後集』七言絶句「代月答」の三・四句「天玄鑑を廻して雲將に霽れむとす 唯是れ西に行く 左遷ならじ」による。「いづかたの」の歌は、この西に向かつて行く月と、どこへ行くとも知れない自分とを対置している。「代月答」に対応する七言絶句「問「秋月」の三・四句」^{かるがゆま}為「に問ふ曾つて終始を告げざりしことを 浮べる雲に掩

はれて西に向ひて流る」は、左遷されて西に流されて行く道真を月に寓したものであり、むしろこの詩の方が「いづかたの雲路にわれもまよひなむ」にふさわしいと見られる。これに對して、「代月答」では、同じく道真は自らを月に寓するのであるが、「唯是れ西に行く、左遷ならじ」としているのである。従って、「われもまよひなむ」を、道真と同じように我も、とは取れない。

先述のように、月に対してどこへ行くとも知れない我が身を恥じるのは、「漢宮万里月の前の腸」に通じるものがある。異郷の月を見て我が身の流離を嘆くという基本的な設定は江詩によっていると考えられる。道真の詩の吟唱は、無実の罪で流浪する境涯を重ねるとともに、さらに月と我が身を対置するためであると考えられる。

「胡角一声霜の後の夢」は、胡の国にある王昭君が、霜夜の夢を角笛によつて破られる。「胡角一声」は異国にあることを思い知らせるものである。「友千鳥」の歌は、冬の暁の空に鳴く「友千鳥」の「もろ声」に寢覚めの寂しさを慰められるとしている。しかし、それは我が身の心細さを際立たせるものでもある。小町谷照彦氏は、この源氏の二つの歌について、「このように、漢詩文的発想の歌と純粹な和歌的発想の歌とが並んで、両者あいまって源氏の悲劇性を強調するのは、須磨引退の当初の歌や八月十五夜の折の歌にも見られたことであり、「須磨」で源

氏の独詠が二首並んだ時の顕著な傾向であるといえよう。」と説かれて^(注2)いる。しかし、「友千鳥」の歌も『和漢朗詠集』の句と基本的に関わっているのである。

「いづかたの」の歌は、「雲路」に迷う我が身を嘆くのに對して、「友千鳥」の歌は寢覚めの寂しさを慰められるとする点で対応している。これは、道真の「問秋月」において、月に我が身を寓し、「浮べる雲に掩はれて西に向ひて流る」と、身の不遇を嘆くのに對して、「代月答」においては、「唯是れ西に行く左遷ならじ」と、それを否定して自ら慰めることに対応しているとも考えられる。また「雲路」と「寢覚めの床」という空間的な対応もある。

次も、源氏が漢詩文を吟唱し、またふまえる場合の、源氏の歌への関わりを見ていく。

夜もすがらまどろまず文作り明かしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ、いとかなかなり。御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。御供の人も涙をながす。おのがじしはつかなる別れ惜しむべかめり。

朝ぼらけの空に、雁連れて渡る。主の君、

ふる里をいづれの春か行きて見んうらやましきは帰る

かりがね

宰相さらに立ち出でん心地せで、

あかなく雁の常世を立ち別れ花のみやこに道やまど
はむ

さるべき都の苞など、よしあるさまにてあり。主の君、か
くかたじけなき御送りにとて、黒駒奉りたまふ。「ゆゆし
う思されぬべけれど、風に当たりては嘶えぬべければな
む」と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。

「形見に偲びたまへ」とて、いみじき笛の名ありけるなど
ばかり、人咎めつべきことはかたみにえしたまはず。日や
うやうさし上がりて、心あわたたしければ、かへりみのみ
しつ出でたまふを、見送りとたまふ気色、いとなかなかな
り。「いつまた対面たまはらんとすらん。さりとともかくて
やは」と申したまふに、主、

「雲近く飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもり
なき身ぞ

かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔の賢き人だに、
はかばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何
か、都のさかひをまた見んとなむ思ひはべらぬ」などのた
まふ。宰相、

「たづかなき雲居にひとりねをぞ泣くつばさ並べし友
を恋ひつつ

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもと悔しう思ひ

たまへらるるをり多くなん」と、しめやかにあらで帰り
たまひぬるなごり、いとど悲しうながめ暮らしたまふ。

(二二四～六)

「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」は、『白氏文集』卷十七、
律詩「(元和)十年三月三十日、微之に澧上れいじょうに別る。十四年三
月十一日夜、微之に峡中に遇ひ、舟を夷陵に停め、三宿して別
る。言の尽くさざる者は詩を以て之を終へんとす。因つて七
言十七韻を賦して以て贈り、且つ遇ふ所の地と相見るの時と
に寄せて、他年會話の張本と為さんと欲する也」の十五・六句、
「酔の悲しび涙を灑ぐ春の盃の裏 吟苦して頤を支ふ暁燭の
前」による。白樂天と旧友元稹が偶々夷陵でめぐり会い、往事
を偲んで涙するのである。また三十一・二句「君は秦地に還り
て炎微けいを辞し 我は忠州に向ひて瘴煙に入る」は、元稹が都に
帰り、白樂天は忠州に左遷される。最後の二句、「未だ死せずん
ば会ず応に相見ること存るべし 又知らんや何れの地復た何れ
の年なるを」は、再会に希望を持ちながらも、そのはかりがた
さを嘆いたものである。

この白樂天と元稹の再会、或いは交友が源氏と宰相の關係に
重なると言われている。^(注23)源氏の「ふる里を」・宰相の「あかな
くに」の贈答歌も、宰相が須磨に退去した源氏を訪ねて再会し、
また別れる場面で詠まれている。源氏の歌は、宰相を帰雁に擬
えて古里に帰る宰相を羨ましく思い、また宰相の歌も、自らを

雁に擬えて源氏の許を立ち去りたいと答える。雁に擬えたのは、先に源氏の歌で初雁を「恋しき人のつら」とし、都に繋がるものと捉えたことと対応していると見られる。ここでも宰相を帰雁に擬え、都に帰って行くものとしている。また「うらやましきは帰るかりがね」は、須磨への旅の場面で引かれた『伊勢物語』の「うらやましくも返る波かな」と首尾対応すると言える。この源氏の歌は、『菅家後集』七言絶句「聞旅雁」の三・四句「枕を欹てて帰り去らむ日を思ひ量らふに 我は何れの歳とか知らむ汝は明春」によると言われるが、宰相を雁に擬えるのは和歌的な発想と考えられる。

次に「風に当たりては嘶えぬべければなむ」は、『文選』巻二十九、「古詩十九首」の七・八句「胡馬は北風に依り 越鳥は南枝に巢くふ」による。友と遠く別れ、また歳月を隔て、「胡馬」に寄せて故郷を恋い慕う心を述べたものである。源氏の「雲近く」・宰相の「たづかなき」の贈答歌は、前を受け、宰相が源氏と別れて宮中に帰った後のことを思つて詠んだものである。源氏の歌は、宰相を「雲ちかく飛びかふ鶴」（宮中にいる宰相）に擬え、自分が春日のように潔白であると訴える。宰相の歌は、自らを鶴に擬え、源氏を「つばさ並べし友」として、宮中に帰った時の友のいない悲しみを述べる。

ここでは「帰るかりがね」を「雲ちかく飛びかふ鶴」に転じ、それらに寄せて古里を恋い慕うとともに、身の潔白を訴えてい

る。ただ雁は実際の景物であるが、鶴は、「慶賀の氣持ち」^(注24)をもって詠まれたと考えられ、実際の景物ではないようである。

終 わりに

『白氏文集』を初めとする漢詩文をふまえ、また引用するのは、その謫居や故郷を遠く離れた旅愁を、源氏の須磨におけるわび住まいと重ねてその悲哀を強調するためである。しかし、須磨巻ではそれに留まるものではなく、和歌的な発想・表現によって、流離の悲しみとともに、古里を離れていても人々との関わりを持ち続けようとする源氏の姿が示されている。

須磨巻では、漢詩文に依るものも含めて、家居・雲居、浦波・初雁、月・袖、月・友千鳥、帰雁・鶴のような題材を用いて歌が詠まれている。即ち、主としてその土地の景物を捉えるのであるが、漢詩文の状況をふまえた上で、それらが人と同じように心を持つもの、また古里の人と自分とを繋ぐものと捉えているところが漢詩文との相違点である。これは漢詩文に対して和歌の特性を最大限に引き出す営みであると考えられる。

そのことよって、須磨の景物は、流離の境涯を思い知らせるものであるとともに、古里への繋がりを見出して心を慰めるものともなる。これを源氏召還のための設定と見ることもできるが、須磨において源氏が流離の悲哀を嘗めることは、改めて

都の人々、特に女君たちとの関わりを再構築させることになつたと考えられる。

- (注1) 古沢未知男著『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』第二章 様式技法、第三節 須磨・明石巻外(断章式引用)(桜楓社 一九六六年六月) は須磨・明石両巻にわたつての論である。
- (注2) 池田勉著『源氏物語試論』「須磨の巻についての覚え書」二七一頁 古川書房 一九七四年十一月
- (注3) 丸山キヨ子著『源氏物語と白詩文集』一八三頁 東京女子大学学会 一九六六年八月
- (注4) 中西進著『源氏物語と白楽天』「9 須磨」一三九頁 岩波書店 一九九七年七月
- (注5) 注2の書二八二頁
- (注6) 小町谷照彦『源氏須磨流論と和歌』——「須磨論のためのノート——」へいあふんがく第一号 一九六七年七月
- (注7) 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)により、冊数と頁数を示す。以下頁数のみ示す。表記は私に改めたところがある。
- (注8) 注2の書二八二頁
- (注9) 『赤染衛門集』の引用は、新編国歌大観第三卷私家集編I(角川書店)による。
- (注10) 新全集頭注
- (注11) 『伊勢物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)による。以下同じ。
- (注12) 伊井春樹「源氏物語における引歌表現の効用」『源氏物語研究集成第九卷』所収 一三七頁 風間書房 二〇〇〇年九月
- (注13) 『白氏文集』、『文選』本文の引用は、新全集付録による。表記は私に改めた。

(注14) 『古今集』以下勅撰集の引用は、新編国歌大観第一卷勅撰集編(角川書店)による。

(注15) 清水婦久子著『源氏物語の風景と和歌』第二章 風景の形成、第二節 風景と引歌(和泉書院 一九九七年九月)に指摘がある。一〇三頁

(注16) 鈴木日出男「光源氏の須磨流論をめぐって——『源氏物語』の構造と表現——」(文学 一九七八年七月)に指摘がある。

(注17) 『古今和歌六帖』、『和漢朗詠集』本文の引用は、新編国歌大観第二卷私撰集編(角川書店)による。

(注18) 注4の書一四六頁

(注19) 新全集頭注

(注20) 注4の書一五二頁に指摘がある。

(注21) 『菅家後集』本文の引用は、川口久雄校注『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』による。

(注22) 注6の論文

(注23) 注1の書一三二頁 注4の書一六三頁

(注24) 新全集頭注

On the Relation between Chinese Poems and Traditional Japanese Poems in the Suma Part of the Tale of Genji

Toshiaki FUJIKOUGE

Abstract

In the Suma Part of the “Tale of Genji,” the references to Chinese Poems represented by the “Collection of Hakurakuten’s works” were made for the purpose of emphasizing the grief by overlapping Genji’s solitary housing and melancholy due to distant separation from his hometown with his lovely country life in Suma. In addition to such sorrow of his forced move, however, Genji’s poems suggest the image of Genji who would hope to continue his relation with other people regardless of separation from his hometown by utilizing the conception and expression of traditional Japanese poems.

While Genji made poems mainly with themes of natural features of the country, the relation with Chinese poems indicates, as different points from Chinese poems, his notion that the features have same mind as persons and they connect people in the hometown with himself. This is thought to be a trial to fully draw out the characteristic of Japanese poems in the tale while standing on the situation of Chinese poems.